
報 告

特別研究費プロジェクト報告書

ドイツ文学研究検索システム構築ならびに
ドイツ文化社会誌資料データ入力

学習院大学文学部教授 轡 田 收 *

I. 画像データ

前年度報告書末尾に記したように、今年度のプロジェクトは前年度研究プロジェクトでし残したことの補完が主業務であった。それは、同報告の「2. ドイツのいくつかの都市の特徴を示す写真図版の読み込み」の作業に当たる。

まず、経験不足というよりは、知識不足が原因となって、作業が進展しなかった理由にふれ、今後同様の試みをされる向きの参考に供したい。

それは、画像資料を電算化しておきさえすれば、直ちに系統化して資料として提示できると考えていた点にある。ほぼ600点あまりの写真（ネガおよびポジ）の読み込みをアルバイトに依頼したものの、その後の処理を視野に入れていなかったため、入力サイズの適性度に全く気づいていなかったことが失敗の最大原因であった。つまり、せっかく時間をかけて電算データ化した材料も、一覧形式に（サムネイル化）しようにも、1データが32MBというのでは、重すぎて手の施しようがなかったのである。おまけに、ノートブックPCのハードディスクに、データを詰めすぎたために、もう少しのところで全体がクラッシュするところであった。

そこでとった解決法が、以下の手順である。

0. 作業のための準備（1日目）

- 一杯になったディスクから不要なものを除く
- 画像ファイルをフォルダ毎に一時的に Lha 圧縮をして、
ディスクの領域を確保する

1. 画像ファイル変換（2日目以降）

- (1) 変換用のツール (Batch-Goo) をインストール。
- (2) 約32MBの Tiff ファイルを(1)のツールを利用して約50KBの JPEG ファイルへ変換。
- (3) (2)で作成した JPEG ファイルを利用してサムネイル用画像を作成。同時にサムネイルおよび作成した画像ファイルの参照用ページも作成。
(サムネイル作成ソフトはフリーソフトの中から選んだ。)
- (4) (3)で作成した WEB ページにキャプションを追加。

*共同研究者：高瀬誠、平井俊雄

以上の作業結果は、ドイツ文学科ホームページ「ドイツを知ろうドイツ語圏のニュース」に仮題<ALBUM>としてアップロードした。

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/germ/deutsche/album/index.html>

II. ドイツ文学研究検索システム構築

標記の概要についてはすでに前年度報告に記したところなので、詳細は省略する。

成果は、ドイツ文学科ホームページ「論文・レポート作成の手引き」に「インターネットによるレポート及び論文執筆のための資料検索法」としてアップロードしてあるので参照していただきたい。(http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/germ/dokubun/kensaku.htm)

アップロードに際しては、さらに学生の便宜を図るために、「ルール」、「文献」、「書式」の項目を追加し、それぞれに「論文執筆のための基本ルール」、「基礎文献収集の手引き」、「卒業論文・修士論文の書式」をかなり詳細に記述した。

III. 文化社会誌資料

これは、2002年度に担当したドイツ文学科授業科目「基礎演習Ⅱ丙」において、分担課題に対して学生がおこなった報告を、指示を与えたのち文書レポートとして提出させたものを、逐次アップロードした。TA（ティーチング・アシスタント）の協力もあって、大部分が今後の参考になることから、選択をおこなって資料化した。現在はI. で述べた「ドイツを知ろうドイツ語圏のニュース」に<Landeskunde>の項目で再録してある。

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/let/germ/deutsche/landeskunde02/berichte.htm>

付記ないし、ぼやき

前年度の報告で、「授業への反映」として述べたのは、「基礎演習Ⅱ丙」についてであったが、このほかにも、担当している「ドイツ語圏の文学」では講義資料をすべてペーパーレス化し、書画カメラで提示しているため、学生の便宜を考え、逐一ホームページに載せることにしている（2003年度は<http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~e750107/>）。レポート課題もそこに「掲示板」を設けて掲載している。

これによってどれほどの、そしてどのような成果が上げられたのかは、確認していない。しかし、始めたからにはこの3年間全うしようとはしているが、担当者にとってはかなりの負担であることには違いない。提示資料作成まではよいとして、もっと簡単にホームページにアップロードする方法はないものだろうか。

縁あって、計算機センターの一翼を担っているつもりで、院外院内での関連用務をおこない、

そして教育現場でITの効用を教えたりして、あれこれ試行錯誤してはみたものの、そのなかで「研究プロジェクト」をはたして有効かつ実効をともなって果たしてきたのか、今年度で停年をむかえるとなると、自己評価は大きく振幅している。